

氏名(本籍)	にしむらたくま 西村 多久磨 (千葉県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博甲第 6546 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中学生における学習動機づけが学業成績と精神的健康に与える影響

主査	筑波大学教授	教育学博士	櫻井 茂 男
副査	筑波大学教授	教育学博士	服部 環
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	外山 美 樹
副査	筑波大学教授	博士(心理学)	濱口 佳 和

論文の内容の要旨

(目的)

本論文では、自己決定理論の下位理論の一つである有機的統合理論に基づき、中学生における学習動機づけの変化、及び学習動機づけと学業成績、自尊感情、抑うつとの関連を検討し、高い学業成績と精神的健康(高い自尊感情と低い抑うつ)を予測する学習動機づけのあり方を明らかにすることを目的とした。

(対象と方法)

本論文では、中学生を対象に7つの実証的な研究を行った。研究1では、中学生における学習動機づけを測定する尺度を開発し、研究2から4では、主に学習動機づけの構造的変化について、研究5から7では、学習動機づけと学業成績、精神的健康との関連について検討した。これらの研究はすべて質問紙による調査研究であり、さらに研究3から7は、一定の期間をおいて再度質問紙を実施する縦断調査によるものであった。

(結果)

研究1では、有機的統合理論に基づいて学習動機づけ尺度を作成した。この尺度は信頼性と妥当性を兼ね備えた、わが国ではじめての尺度となった。先行研究で問題とされた、①尺度の信頼性の問題、②自己決定連続体の歪みの問題、③因子構造の妥当性の問題の3点が解決された。研究2から4では、研究1で作成された尺度を用いて、学習動機づけの構造的変化が検討された。その結果、小学生から中学生にかけて、内的調整による動機づけ(自律性がもっとも高い動機づけ)と同一化的調整による動機づけ(自律性がつぎに高い動機づけ)は低下することが明らかにされた。特にその傾向は、小学校から中学校に移行する時期において顕著であった。さらに、各個人の動機づけのプロフィールに着目した分析を行った結果、内的調整による動機づけと同一化的調整による動機づけが共に高い自律型の動機づけプロフィールをもつ子どもが減少することが明らかにされた。

研究5と6では、学習動機づけと学業成績、精神的健康との関連が検討された。有機的統合理論によると、自律性がもっとも高いとされる内的調整による動機づけが、学業成績と精神的健康をよりよく予測できるとされる。分析の結果、精神的健康に対しては、理論通り、自律性がもっとも高いとされる内的調整による動

機づけがよく予測する一方、学業成績に対しては、自律性がつぎに高いとされる同一化的調整による動機づけのほうがよく予測することが明らかにされた。そこで研究7では、なぜ同一化的調整による動機づけが学業成績をよく予測するのか、メタ認知的方略を媒介変数とする媒介モデルを作成し、実証的な研究を行った。さらに、学習動機づけのプロフィールに着目した検討も行い、内的調整による動機づけと同一化的調整による動機づけが共に高いプロフィールをもつ中学生が、高い学業成績と精神的健康をもつことが予測された。

(考察)

本論文の結果から、個人のプロフィールとしては、内的調整による動機づけと同一化的調整による動機づけを共に高くもつことが、高い学業成績と精神的健康につながるということが明らかにされ、両方の動機づけを高く持つことが中学生にとって重要であることが示唆された。また、各調整による動機づけの特徴も明らかにされ、精神的健康に対しては内的調整による動機づけが、学業成績に対しては同一化的調整による動機づけがよりよい予測因であることが明らかにされた。学業成績に対する同一化的調整による動機づけの優位性は有機的統合理論と矛盾する結果であったが、メタ認知的方略を媒介変数とする媒介モデルを提案し実証的な検討を行った結果、なぜ自律性の程度が内的調整による動機づけよりも低い同一化的調整による動機づけが学業成績をよりよく予測するのかについて、その原因のひとつ（メタ認知的方略の使用）が解明できた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、中学生を対象に有用な学習動機づけ尺度を作成した点、それを用いて学業成績と精神的健康との関連を横断・縦断調査によって精緻に検討した点、さらに学業成績の予測に同一化的調整による動機づけが優れている点を新たなモデルによって説明し実証した点、において学問的に高く評価できる。また、研究結果が教育実践に対して多くの示唆を与えるという点でも優れているといえる。今後の課題としては、より多くのサンプリングに基づき研究結果の一般性を検討すること、学習動機づけの個人内での変化を検討すること、さらには学習動機づけを高める具体的な方法について検討すること、などが挙げられる。

平成25年2月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。